HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代朝鮮語における接頭辞ㅊについて
Author(s)	門脇, 誠一
Citation	北海道大學文學部紀要, 48(3), 15-35
Issue Date	2000-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33754
Type	bulletin (article)
File Information	48(3)_PL15-35.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 48-3 (2000)

現代朝鮮語における接頭辞 치について

門 脇 誠 一

はじめに

本稿は、現代朝鮮語の接頭辞に関する研究の一環として、門脇(1997,1998)で行った내,내리の分析に引き続き、接頭辞 치に関する分析を行うものである。今回扱う接頭辞 치は、接頭辞 내리と意味的に対立するものであるが、後者が「下りる、下ろす」という意味の自立語に起源を持つ語であるのに対して、前者はその起源がはっきりしないものである。ところで、この치という接頭辞と類似の意味を有する接頭辞に올리という形式があるが、この올리という形式は韓国ではどうも使用されないらしい。何人かの韓国からの留学生に確かめてみたが、一部の動詞に関してその語基に올려を前置させた形(以下올려形と呼ぶ)を使用することはあるが、語基に올리を前置させた形(以下올리形と呼ぶ)を使用するという人はいなかった。そのことは、韓国で出版されている辞書の記述を見てもわかる。올리形に関しては、『동아새국어사전』(略語『동』)には1例もあがっておらず、『국어대사전』(略語『대』)にはあがってはいるものの、올리닫다「駆け上がる」と올리떠리다「投げあげる」の2例しか記載されていない。しかも、後者は咸鏡道の方言形となっているものである。

この올리形が金鍾塤(1973)の接頭辞のリストにもあげられていないことから見て、韓国内ではこの形が使用されていないと見てよさそうである。ところが、中国、北朝鮮で出版されている辞書には치形と並んで、올리形、さらには語によっては올려形も記載されているのである。実際、ハルピン大学出身の朝鮮族の留学生に確かめて見たところ、올리形は치形よりもよく使用されるとのことであった。黒竜江付近の朝鮮語に関しては門脇(1997)でも触れ

たことがあり、今回も並行して調査を行ったが、韓国のそれとはかなり異なった体系をなしており、今回の調査結果と一緒に扱うことができないので、今回は韓国内で使用されている치形だけに焦点を当てて考察することにし、必要に応じて올려形についても触れることにする。そして、黒竜江付近の朝鮮語における올리形について得られた興味深い結果については別の機会に述べることにしたい。

今回の調査に関しては、まず、前回同様記載されている関連語の数が最も多く、しかも、韓国で出版されている『동』『대』の両辞典、さらに北朝鮮で出版されている『조선말사전』(略語『조』) に記載されている語のほとんどすべてを含んでいる『朝中詞典』(略語『中』) から치形総数41個を取り出した。その中で全羅南道出身の金恒汨氏が使用するとして選びだしたものが22個ある。その22個に対して、ソウル出身の朴相鉉氏が使用すると回答したものは13個だけであった。しかし、1．1 B. でも触れるように同じソウル出身と言っても、かなりの個人差があると思われるので、個々の語についての調査結果については異論が出てくることは十分予測されるが、同じ体系を有していると考えられるので、今回は金氏が使用するとして選びだした22個を対象にして分析することにする。なお、今回協力を得た留学生は出身地は異なるが、同世代（いずれも現在30才である）の男性である。今回の調査の結果では、同じ30才前後の世代で金氏よりもソウル方言を使用する朴氏のほうが辞書に記載されている語彙のうち使用語彙が少ないことがわかった。他の方言でどのような様相を示しているか知りたいところであるが、残念ながら今のところわからない。

なお、今回は文学作品からの用例の収集は行えなかった。

今回協力を得たのは、主に北海道大学大学院文学科言語学専攻　金恒汨氏（全羅南道出身1969生）と同大学院文学科国文学専攻の朴相鉉氏（ソウル出身1969生）の二人である。

本論を書くに当たって使用した辞書は次の通りである。

『조선말사전』	(조)	1962	(朝鮮民主主義共和国)
『朝鮮語大辞典』	(朝大)	1986	(日本)
『동아 새국어사전』	(동)	1989	(韓国)
『朝日詞典』	(中)	1993	(中国)
『국어대사전』	(대)	1993	(韓国)
『朝鮮語辞典』	(朝)	1993	(日本)

1. 本　　論

それでは以下に、現代朝鮮語における接頭辞 치について分析していくことにしよう。本論では、接頭辞 치について考察するに際し、それと類似の振る舞いをする올리다の連用形 올려と、それに오르다、올리다が後項動詞として現れる複合動詞とも関連づけて考察することにしたい。

1．1　接頭辞 치に関する先行研究

接頭辞 치を直接扱った論文はこれまでのところ見つけることができなかったが、何らかの形で　この接頭辞について触れているもので筆者の目に触れたものは以下の通りである。なお、김창섭(1996)には치は勿論のこと、올려，올리についての言及がない。

A. 金鍾塡(1973)のリストに치が載っており、次のようになっている。

語源の欄は空欄になっており、語義は「上にあげること」、基語の品詞別分類については「用言」とし、接頭辞用例として「치밀다，치받다，치솟다」があがっている。

B. 김정은(1995)には、次のような記述がある。

치について、「上に向かって」の意味で、名詞語基との結合は치사랑 一つだけだが、動詞語基との結合では特に他動詞との結合が自由であると述べ、

以下の単語19個あげている。(1)

치감다，치걷다，치닫다，치뚫다，치뛰다，치뜨다，치매기다，치몰다，치밀다，치받다，치보다，치뻗다，치솟다，치쌓다，치쏘다，치쓸다，치오르다，치잡다，치훑다

C. 김계곤(1996)127ページに次のような記述がある。

치：上に向かって　　치감다　치긋다　치닫다　치뜨다　치매기다　치먹다
　　치밀다1（下から上へこみあげる）　치밀다2（下から上へ押し上げる）
　　치받다　치잡다　치치다

接頭辞 치に関して『대』を初め韓国で出版されている辞書には、「動詞の上について、上に上がる　の意を表す語」と記述され、北朝鮮で出版された『조』には「動詞の前について　上に行くように、上に向かって　という意味を表す語」と記述されている。つまり、どの辞書にも「方向」の意味だけがあがっており、「強調」の意味をあげているものは一つもない。このことは、上に上げた論文における記述を見ても同様のことが言える。しかし、実際に調査してみると、インフォーマントは치닫다，치밀다，치솟다，치뻗치다などの語にはいずれも「勢いよく、激しく」といった強調の意味を感じているのである。

なお、インフォーマントによると、C. にあがっている치밀다は1の意味でしか使わず、2の意味では普通밀어올리다という複合語を使用すると言う。

1．2

接頭辞 치について分析するに当たり、次の点に注目しつつ考察することに

(1)　著者である김정은氏はソウル出身であるが、あげられている語を見ると、치뻗다を除いてすべて門脇が最初『中』から選んだ41個の中に入っているものであるが、全羅道出身の金氏が使用しないと答えた語もかなり入っている。また、ソウル出身の朴氏が使用可能と答えたのはこれらのうち8個だけである。著者の年代が書かれていないため分からないが、同じくソウルにいる人間と言ってもこのようにかなり個人差があることがわかる。

する。

1. 치形は「方向」「強調」という２つのパラメータによってどのように分類されるか。
2. 치形と並んで올리形または올려形が共存するかどうか。もし共存する場合、意味上の違いがあるかどうか。
3. 対語として내리形あるいは내려形を有しているかどうか。
4. 오르다または 올리다を後項動詞とする複合動詞が存在するかどうか。
5. 치，올려が前置される派生動詞と오르다，올리다が後項動詞として後置される複合動詞との関係はどうなっているか。
6. 動詞語基に接頭辞치と後項動詞の오르다または올리다が同時に結合可能かどうか。

1. については、すべての辞書の記述に「下から上へ」という「方向」の意味しかないことについては前述した。その記述だけを見ると、치形のすべてが「方向」の意味を有しているかのような印象を受けるが、実際は「方向」に関して関与しないものが多い反面、「勢いよく、力強く」といった「強調」の意味を有しているものもあることがわかる。
2. については、前述のとおり、韓国においては올리形が使われないようなので、올려形だけを対象にすればよいことになる。ちなみに、日本で出版されている辞書に記載されている語彙は韓国、北朝鮮いずれの辞書からも収録されているので、올리形，올려形についてもその両形が記載されている。そのため、地域に関係なくいずれの形も同等に使用されているような印象を与えてしまうのである。(2)

(2) ハルピン大学出身の康秋月氏によると、黒竜江付近の朝鮮語では올리形がごく普通によく使用されているとのことであり、韓国とは逆に올려形はあまり使用されないという。『中』では、올려形を見出しに立てているが、すべて올리の項を参照するようにという指示があるところから見て、올리形のほうが標準形と考えられているのではないかと思われる。

なお、ソウル出身の朴氏は올려形に関して使えるものもあるにはあるが非常に不自然な感じがすると報告している。

3.4.5.6. に関しては簡単にまとめて触れておこう。例えば、치세우다という語は 옷깃을 치세우다 「衿を上に立てる」のように使われ、同時に올려세우다という形も可能である。この語は常に上への運動を表すので、내리세우다あるいは내려세우다という形は存在しない。その意味で、この語は내리形、내려形とは対立しない。そして、この場合、올리다を後項動詞とする세워올리다，치세워올리다という複合動詞形も可能である。ここで注目すべきは、「強調」を表す接頭辞 치と「方向」を表す後項動詞が同時に役割分担をしながら共存する形が存在するということである。さらに詳しくは２．２を参照のこと。

一方、치몰다という語があり、「動物などを追いやる」という意味の場合は、「方向」に関係なく올려몰다「下から上へ追いやる」 내리몰다「上から下へ追いやる」いずれの意味にも使用される。そして、それぞれ、올리다，내리다を後項動詞とする몰아올리다，몰아내리다という複合動詞形とも可能である。ここでも、치몰아올리다、치몰아내리다のように「強調」と「方向」とを役割分担している形が見られる。

１．３　語基の分離について

一部の合成用言の中には、その内部に副語尾が入り込み、あたかも２単語のようになるものであり、分離用言と呼ばれている。(3) 門脇(1998)では김창섭(1996)が내리形と내려形に関して論じた部分を引用して説明したことがあったが、ここでもう一度確認のために触れてみることにしよう。김창섭(1996)94頁で言及しているのは次のことである。내려갈기다は내려들 갈긴다，내려는 갈긴다，내려만 갈긴다，내려도 갈긴다，내려를 갈긴다のよう

(3)　分離用言については菅野(1981) を参照。

に語基の分離が起こるので、내려を接頭辞と考えることはできないが、내리갈기다，내리깔다，내리누르다，내리닫다，내리뜨다，내리먹다，내리비추다，내리쓰다などは語基の分離が起こらないので接頭辞と考えることができるというものである。そして、続いて、「一般的に語基の分離は語幹の先行部分が単音節であれば起こらないという音韻論的制約を有している —」と述べ、その例として、처넣다，처담다，처때다，처쟁이다，처쌓다，처먹다，처마시다，처바르다，처박다等をあげている。しかし、これらのことを留学生に確認してみると、実状はかなり異なっていることがわかるのである。

내려形に関して金氏からは만，는という副助詞であれば可能だというものが多いという回答を得たが、朴氏からは分離は不自然だとの回答を得た。また、처形に関しては朴氏がすべて分離できないと回答したのに対して、金氏から처먹다，처마시다，처바르다，처박다に関しては分離可能だとの回答を得た。この語基の分離に関しては、どうも方言差、個人差がかなり大きいような感じがするが、少なくともどの方言にも当てはまる規則のように記述している、「単音節の場合は分離が起こらない」という議論は再考を要することがわかる。

さて、今回語基の分離に関して내리形と意味の上で対立する올려形について調査してみた。김창섭氏が言うように、語基分離ができるかどうかを내리，내려を接頭辞と認めるかどうかの判断基準とすることができるのであれば、意味の上で対立する올려についても同様のことが言えるはずだからである。２人から得た情報だけで結論を下すのは危険であり、もっと広く調査したうえで報告すべきだと思われるが、だいたいの傾向は分かるのではないかと思われる。今回の調査では、올려形について２人からかなり異なった回答を得た。少なくとも朴氏に関して言えば、김창섭氏の基準によると올려は立派に接頭辞と言えることになる。

２．치の用法

さて、以下に接頭辞 치がどのような使われ方をしているかを、올려形と오

르다，올리다が後項動詞として現れる複合動詞とも関連づけて考察することにする。

2．1　치と올려との違い

「上から下へ」という「方向」を表す내리と내려と並行的に、「下から上へ」という「方向」を表すには理論的には올리と올려とが考えられるが、実際は韓国では올리は使用されずもっぱら치と올려である。一見すると、치が올리の代わりをしていて、치と올려の関係が 내리と내려の関係と並行的になっているようにも見えるが、必ずしもそうではない。

a. まず치は接頭辞として動詞と名詞に付くのに対して、올려は動詞にしか付かないという点である。金鍾塤(1973)には치は用言にしか接続しないと記述しているが、実際は 내리사랑은 있어도 치사랑은 없다.「上からの愛はあっても、下からの愛はない：上の者は下の者を愛せるがその逆は難しい」という限られた表現でしか使用されないとは言うものの、明らかに名詞に接続する形も存在するのである。

b. 치は後続する動詞語基に「強調」の意味を付加することがあるが、올려にはそのような働きはない。

c. 치形には意味を特殊化させる働きがあるが、올려には「方向」の意味しかない。

特に、치닫다３，치밀다，치받치다，치뻗치다，치솟다などの感情を表す語は交替形として올려形をとらない。

d. 치形は語幹の分離が起こらず、치を完全に接頭辞と考えられるのに対して、올려は語幹の分離に関しては方言差、個人差があり、朴氏のように分離が不自然だと言う者もいるし、金氏のように만，는等の限られた副助詞だけだが分離が不自然ではないと言う者もいる。また、語によっては올려が「方向」だ

けを表す接頭辞と考えてもよいような場合もある。(4)

3．치形の意味

接頭辞 치は後続する語基に対して、「下から上へ」という「方向」の意味と、「力強く、勢いよく」という「強調」の意味を付加する。今、치形を意味の上から分類するに際し、「方向」と「強調」という２つのパラメータに、対語として내리形または내려形が存在するかどうかという特徴も加えて分類すると次のようになる。対象とする語は金氏が使用可能としてあげた形を中心にしたものである。

３．１　「方向＋」「強調＋」

A. 対語として내리形または내려形が存在するもの

2. 他動詞

치뜨다　치긋다　치쌓다

B. 対語として　내리形や내려形が存在しないもの

2. 他動詞

치걷다

3. 自動詞

치닫다３　치밀다　치받치다１ａ　치뻗치다　치솟다

A. 2. の치뜨다は対語として내리뜨다を持つが、前者は「目を単に上に向ける」という意味でも使用できるようであるが、多くは 눈을 위로 치뜨고 매섭게 쏘아본다．「目をむき怖い顔をしてにらみつける」のように意味を特殊化させて使われることが多い。一方、この치뜨다には올려뜨다という類義の語があり、こちらは単に「上目使いをする」という意味で使用される。このよう

(4)　門脇(1998)では내리に対して내려を接頭辞化する過程にあるとして準接頭辞として扱うと述べたが、それと並行的に올려についても準接頭辞として扱うことにする。

に올려形が共存する場合、意味の上で差異があることがある。

치긋다は「上方に向かって勢いよく線を引く」という意味で使われる語である。これに対しては올려긋다という形も可能だが、その本来の意味は「行を上に上げて横に線を引く」であるが、実際は、「下から上へ向かって線を引く」という意味でも使用されることが多いようである。ただし、この場合には強調の意味はない。これと同様のことは내리긋다，내려긋다についても言える。(5)

B.

2. の치걷다は「たくしあげる」の意味の語であり、「歩く」という意味の強調形としては使わない。また、複合動詞は걷어올리다，치걷어올리다となる。

3. の単語はいずれも「怒り、悲しみなどの感情が激しくこみ上げる」という意味で使用される場合のものである。치닫다３は「感情がこみ上げる」という意味の語である。증오심이 머리끝까지 치달았다.「憎悪の気持ちが頭のてっぺんまであがってきた」。これに対する複合動詞は치달아오르다となる。また、치밀다は本来接頭辞치＋밀다「押す」という構造をなすものであるが、「押し上げる」という意味では使用せず、「感情がこみ上げてくる」というように意味を特殊化させて使用する。これに対する複合動詞は치밀어오르다となり後項動詞は自動詞の오르다となる。「押し上げる」という意味で使用する場合は밀어올리다というように올리다を後項動詞とする複合動詞を使用しなければならない。つまり、치밀다は常に感情を表す自動詞として使用されるためこれに対応する複合動詞は치밀어오르다であって、치밀어올리다という形は存在しない。

치받치다１ａは「感情が激しくこみ上げる」という意味で使用される語である。

---

(5) 門脇(1998) 参照。

ここで、받다，받치다との関連性について触れておこう。받다には多くの意義があるが、ここで問題になるのは「支える」という意味の場合である。우산을 받고 걸었다.「傘をさして歩いた」に対して 우산을 치받고 걸었다. と言うと、強風などで傘が吹き飛ばされないようにしっかりとやや上方に向けて支えて歩くと言った文脈で使用されるものである。それに対して、치받치다はこの「力強く支える」という意味の他に「感情が激しくこみ上げる」という意味が追加されている。치받치다bについては２．３を参照。

치뻗치다に関し、뻗다，치뻗다，뻗치다，とを関連させて説明することしよう。

뻗다は自他両用の動詞で、自動詞としては「伸びる、(根などが) 張る」「力が及ぶ」「くたばる」、他動詞としては「伸ばす」「差し出す」等の意味がある。치뻗다は뻗다に「強調」の意味が付加されたものであるが、上の意義のすべてに対して「強調」の意味が付加されたのではなく自動詞・他動詞ともに最初の「伸びる」「伸ばす」の意味にだけ「強調」の意味が付加されている。

また、뻗치다は辞書には뻗다の強調形となっているもので、뻗다と同様自他両用の動詞であるが、뻗다の「伸びる」「伸ばす」の意味に加えて、「感情がこみ上げる」という意味が追加される。ところで、치뻗치다は치뻗다に接尾辞 치が付いたものか、뻗치다に接頭辞 치が付いたものかが問題となる。インフォーマントによると、強調の意味は接頭辞の치にあると感じられるとし、接尾辞 치には特に強調の意味は感じられないと言う。このことから今のところ、뻗치다に接頭辞 치が付いたものと分析しておく。ところで、この動詞は自動詞としての用法しかなく、しかも、自動詞としては「感情がこみ上げる」という意味でだけ使われるという具合に特殊化してしまっている。치솟다は「感情がこみ上げる」という意味の他に「山がそびえる、液体などがわき上がる」という意味でも使用される。要するに、ここに属している語は接頭辞 치が付くことによって語の意味が特殊化されていると言うことができる。

３．２　「方向＋」「強調－」

A. 対語として내리形または내려形が存在するもの

2. 他動詞

치매기다

B. 対語として내리形や내려形が存在しないもの

2. 他動詞

치받다１　치세우다　치받치다２

A.２の치매기다は「順番・番号を逆に下から上につける」という意味の語であるが、対語として내리形があるので「方向」の意味が明瞭に現れる。

B.２の치받다１は「支える」という意味の語であるが、２．１のB.３で触れたように「強風などに吹き飛ばされないようにして支える」という意味に「強調」という特徴があるようにも思われるが、インフォーマントは特に強調の意味は感じられないというのでこちらに分類しておいた。

치세우다は「衿などを立てる」の意味の語で、これも特に「勢いよく、力強く」といった「強調」の意味はないという。しかし、この場合、単に세우다を使う場合とは、同じ「衿を立てる」にしても「曲がらないようにピンとまっすぐ立てる」という意味で使用されるという違いがある。また 고양이가 꼬리를 치세우다 「猫がしっぽをピンとまっすぐに立てる」という場合も同様であるが、そこに「強調」の意味が感じられるとすれば「強調＋」の方に分類しなければならない。なお、これには올려세우다という올려形が存在し、さらに複合動詞 세워올리다が存在すると同時に치세워올리다という形も存在することは前述の通りである。

B.２の치받치다２は「支える」という意味の語であるが　インフォーマントによると치받다１「傘をさす」の場合と同様、特に強調の意味は感じないと言う。用例をあげると次の通りである。

무너질듯한 집을 이 기둥이 치받치고 있다.「倒れそうな家をこの柱がしっかりと支えている」

3．3 「方向－」「強調＋」

A. 対語として내리形または내려形が存在するもの

2. 他動詞

치꽂다　치닫다２　치받다２　치감다　치뻗다２

치달리다２　치뚫다　치몰다２　치훑다

3. 自動詞

치달리다１　치닫다１　치뻗다１

B. 対語として내려や내려形が存在しないもの

2. 他動

치몰다１

3. 自動詞

치받치다１ｂ A.

2. の치뻗다は本来自他両用の動詞である。ほとんどの辞書に치벋다の形で記載されているものであるが、この形を使用するという者はいないようなので、치뻗다の形を辞書に記載しておくべきであるし、これと並んで치뻗치다の形も記載されるべきものである。さて、この動詞は自動詞としては 나무가지가 치뻗어 있다.「木の枝が伸びている」他動詞としては 나무가 뿌리를 치뻗고 있다.「木が根を伸ばしている」のように用いられる。これらが「方向－」の特徴を有することにしてあるのは　自動詞・他動詞ともに次の文が可能だからである。

自動詞文

나무가지가 치뻗어올랐다.「木の枝が上に向かって伸び上がった」

뿌리가 치뻗어내렸다.「根が下に向かって伸びた」

他動詞文

팔을 치뻗어올리고 있다.「腕を上に向かって力強く伸ばしている」

나무가 뿌리를 치뻗어내리고 있다.「木が根を下に向かって伸ばしている」

そして、올려形については　他動詞の場合だけ올려뻗다が可能である。つまり、치뻗다は뻗어오르다（自動詞）、뻗어올리다（他動詞）の両方の意味を有しているが、올려뻗다は他動詞の뻗어올리다の意味しか持っていないということである。(6) そのため、치뻗다の自動詞に１、他動詞に２の番号を付けて区別した。

本来他動詞である올리다の連用形である올려が前項要素として使用される場合、뻗다が持っている自動詞としての性質を捨て動詞全体が他動詞として働くことになる。さらに、치뻗어오르다，치뻗어올리다，치뻗어내리다などの形から「強調」の意味は接頭辞 치によって表され、「方向」の意味は後項の오르다，올리다，내리다によって表されるという具合に役割分担が行われているとみることができよう。

2.

치꽂다は辞書には「下から上に向かって刺す」となっているが、次のような用例がある。천정에 창을 치꽂았다.「天井に槍を刺した」 배구 공을 방코트에 치꽂았다.「バレーボールの球を相手コートに打ち込んだ」後者の例は上から下へ向かって行われる動きである。치몰다２は１．２で触れたのでここでは繰り返さない。치받다は、「上に向かって突き上げる」「ぶつける、突く」とい意味の語である。しかし、実際の用例を見ると必ずしも方向に関して関与しているとは思えないものが多い。 우산을 치받고 걸었다.　は単に

(6)　門脇(1998)の記述に誤りがあるので、ここで訂正しておきたい。17頁に올려뻗다に関する記述があり、내리뻗다が自他動詞両用の性質を有しているのと並行的に、뻗어오르다、뻗어올리다に対応する自他両用の動詞だとしてある。今回の調査で、韓国で使用される올려뻗다には他動詞の意味しかないのに対して、黒竜江付近の朝鮮語の올리뻗다は自動詞･他動詞両用に使用されることがわかった。

「傘を上に向けてさして歩いた」という意味ではなく、強風などで傘を吹き飛ばされないようにしっかりと支えるようにしてさして歩いた」といった文脈で使用されるものである。また、서로 머리를 치받고 싸운다.「お互いに頭をぶつけ合って喧嘩する」 새가 벽을 치받고 죽었다.「鳥が壁にぶつかって死んだ」なども下から上へという「方向」に関して積極的に関与しているとは言えない。

치감다は「勢いよく巻きつける」という意味の語である。거미가 거미줄로 나비를 칭칭 치감고 있다.「蜘蛛が糸で蝶をぐるぐる巻き付けている」というように使用される。これも「下から上へ」という特徴はない。올려形も可能で、複合動詞は감아올리다となる。릴을 감아올리다「リールを巻き上げる」치달리다2は「馬などに乗って走らせる」という他動詞の意味の動詞である、対応する複合動詞は치달려오르다という自動詞となる。

3.

치닫다1は「勢いよく走る」と言う意味の語である。これも方向に関しては中立的である。산비탈을 위로 치닫는 노루「山裾を上に駆け上がるノロ鹿」산 기슭으로 치닫는 노루「山の麓へ駆け下りるノロ鹿」평야를 치닫는 노루「平野を駆けるノロ鹿」

また、치닫다2は「勢いよく閉める」という意味の語であるが、金氏が使用すると言うのに対して朴氏は使用しないと言うものである。金氏によると、この語は下から上に開ける窓でも横に開ける窓でもどちらも使用可能とのことである。そして、はっきりと下から上への運動であることを示したいときは닫아올리다のように올리다「あげる」を後項動詞とする複合動詞を使用すると言う。なお、上から下に開ける窓の場合は使いにくいとの報告を得ているが、これは내리닫다という対語が存在するからだと思われる。

치달리다1は「勢いよく走る」と言う自動詞の意味の語であるが、方向に

関しては中立的である。

B. 2. の치몰다 1 は「乱暴に運転する」という意味を表す語であり「方向」に関しては関与しない。上に向かって運動する場合は치몰아 올라가다、下に向かって運動する場合は치몰아 내려가다と言わなければならない。

B. 3 の치받치다 1 b は「勢いよくぶつかる」という意味の自動詞である。用例は자동차에 치받쳐서 죽었다.「自動車にぶつかって死んだ」

4．올려形と複合動詞について

以下にあげたものは、치形に対して올려形が可能なもの、また오르다，올리다を後項動詞とする複合動詞が可能なものについて調査した結果をまとめたものである。

치뜨다	올려뜨다		치떠올리다	
치받다 1	올려받다		— — —	支える
치세우다	올려세우다		치세워올리다	
치뻗다	올려뻗다	他	치뻗어올리다	
		自	치뻗어오르다	
치뻗치다	올려뻗치다		치뻗쳐오르다	
치감다	올려감다		치감아올리다	
치꽂다	올려꽂다		— — —	突き刺す
치몰다 2	올려몰다		치몰아올리다	追い込む
치긋다	올려긋다		치그어올리다	
치걷다	올려걷다		치걷어올리다	
치쌓다	올려쌓다		치쌓아올리다	
치매기다	올려매기다		치매겨올리다	
치닫다 2	올려닫다		닫아올리다	閉める

さらに、올려形はないが오르다，올리다を後項動詞とする複合動詞が可能なものは以下の通りである。

치밀다	— — — —	치밀어오르다	
치뻗치다	— — — —	치뻗쳐오르다	
치솟다	솟아오르다	치솟아오르다	
치닫다 3	달아오르다(7)	치달아오르다	感情がこみ上げる
치몰다 1	몰아올리다	치몰아오르다	運転する
치뚫다	뚫어올리다	치뚫어올리다	

4．結　　論

以上、接頭辞 치の機能について、올려形、오르다，올리다を後項動詞とする複合動詞、対語として내리形または내려形があるかどうかといったことと関連させて述べてきた。それをまとめたのが巻末の表である。前回の調査と同様個人差の大きいことを実感せざるを得ず、今回の調査だけで接頭辞 치の全体像が見えてきたとは言えないが、それでも韓国で使用されている言語の最大公約数的な特徴のいくつかは指摘できるのではないかと思われる。それを箇条書きにすると次の通りである。

1．接頭辞 치の意味に関する辞書の記述は、例外なく「下から上へ向かって」という「方向」の意味だけを表すようになっているが、それは正確ではない。接頭辞 치が付くものがすべて「下から上へ向かって」という「方向」を表すとは言えないし、中には辞書には記述されていない「勢いよく、激しく」といった「強調」の意味を明らかに有していると考えられるものもあるのである。このことはインフォーマントの言語意識とも合致している。

---

(7)　形の上では달아오르다は他の動詞と並行的に치닫다の複合動詞と考えてよさそうであるが、この語は「顔などが火照って赤くなる」という意味の語で、両者の関連性についてははっきりしないが一応ここにあげておくことにする。

２．「方向」「強調」という２つの特徴について分析してみると、巻末の表からもわかるとおり、「方向－」「強調＋」の特徴を有する語が多いことがわかる。また、「方向＋」「強調＋」の特徴を有する語の中には、感情を表す語が多いというのも大きな特徴である。日本語でも、「興奮して頭に血がのぼる」「気持ちが落ちつく」などの表現があるように、感情の起伏を「上下」の方向として捉えているのと同様、朝鮮語の場合もやはり「上下」の方向として捉えているものと考えられる。

３．치が「方向」に関して中立的だと言う場合、対語として내리形または내려形がない場合であり、対語が存在する場合は「上から下への」運動に関しては使用しにくいようである。

４．また、치形と올려形に関して言えば、올려形の場合は「強調」の意味は全くなく、もっぱら「方向」だけの意味を表すのに対して、치形は「強調」の意味が加わる点が異なっている。また、올려形は「下から上へ」という「方向」の意味だけを付加するという、いわば接頭辞に準じた働きをする場合と、本動詞として「上にあげて」という意味で使用される場合もある。

例　올려입다「ずり落ちそうなズボンなどを上にあげてはく」
　　올려차다「刀などを上にあげて身につける」

５．치が付くと意味の特殊化を起こすものがある。その多くは感情を表す語である。

６．複合動詞の形を見ると、複合動詞として　Ｖ＋오르다（自動詞），Ｖ＋올리다（他動詞）と並んで、치＋Ｖ＋올리다（自動詞），치＋Ｖ＋올리다（他動詞）という形が存在している。後者の場合、接頭辞 치が「強調」を오르다，올리다が「方向」を表すという具合に役割分担を行っていることになる。

７．さらに、韓国では若い世代は勿論のこと、一般に오르다 올리다を後項動

詞とする複合動詞の方が好んで使用されていることが指摘できる。

치形の中で「方向」に関与しないで使用される語が、同じく「方向」に関与しないで使用される場合の 내려または들이形と類似の文脈で使用される場合、意味の上で違いがあると言うのであるが、そうした面の意味の研究は行われていない。

参考資料

1	올려＋　내리／내려 ＋			
	方向＋強調＋	方向＋強調－	方向－強調＋	方向－強調－
他	치꽂다 치뜨다 치쌓다	치매기다	치꽂다 치닫다２ 치긋다 치받다２ 치뻗다２	

치닫다２ 閉める　치받다２ ぶつける　치뻗다２ 伸ばす

2	올려＋　내리／내려－			
	方向＋強調＋	方向＋強調－	方向－強調＋	方向－強調－
他	치걷다	치받다１ 치세우다 치받치다２		

치받다１ 傘をさす　　치받치다２ 支える

3	올려－ 내리／내려＋			
	方向＋強調＋	方向＋強調－	方向－強調＋	方向－強調－
他			치달리다２ 치뚫다 치몰다２ 치훑다	
自			치닫다１ 치달리다１ 치뻗다１	

치닫다１ 走る　치몰다２ 追い込む

4	올려－ 내리／내려＋			
	方向＋強調＋	方向＋強調－	方向－強調＋	方向－強調－
他			치몰다１	
自	치닫다３ 치밀다 치뻗치다 치솟다 치받치다１a		치받치다１b	

치닫다３ 感情がこみ上げる　치받치다１a 感情がこみ上げる
치받치다１b ぶつかる

『朝中詞典』語彙リスト

①치形，올려形，올리形の三形が載っているもの

치밀다 치쌓다

②치形，올려形の両形が載っているもの

치걷다 치뜨리다 치몰다 치받치다 치세우다

③치形，올리形の両形が載っているもの

치닫다　치달리다 치받다１ 치붙다 치솟다 치쌓이다

④올리形、올려の両形が載っているもの

올리뛰다　올리쏘다

⑤올리形しかないもの

올리긁다　올리엮다 올리추다

⑥올려形しかないもの

올려던지다　올려보내다　올려붙이다　올려뿌리다

⑦치形しかないもの

치감다　치꽂다　치긋다　치다루다　치달다　치대다 치들리다　치뚫다
치뜨다　치뜰다 치매기다　치먹다 치먹이다　치받다2 치받다3 치받들
다　치받들리다 치벋다 치보다 치불다　치살리다 치쉬다
치오르다　치올리다 치잡다 치째지다 치치다1 치치다2　치훑다
치곧아오르다 치달아오르다

参考文献

金鍾塤(1973)「接辞研究 — 接頭辞研中心으로 — 」(『国語学資料［論文］集』第二輯　形態論(1981)に所収)

김정은(1995)　『국어 단어형성법 연구』　　박이정

김계곤(1996)　『현대 국어의 조어법 연구』　박이정

김창섭(1996)　『국어의 단어형성과 단어구조 연구（国語の単語形成と単語構造の研究)』国語学叢書21　国語学会

門脇誠一(1997)「現代朝鮮語における接頭辞내ーについて」日本語と外国語との対照研究IV　『日本語と朝鮮語』下巻　研究論文編　国立国語研究所

門脇誠一(1998)「現代朝鮮語における接頭辞내리について」『北海道大学文学部紀要』47-3 通巻96号